

# 《匂宮の琵琶》と《女一宮の箏の琴》

——繋がりあう宇治十帖の音楽——

赤 迫 照 子

はじめに

『源氏物語』正篇において、明石一族の音楽は物語を紡ぎ出す重要な要素であった。例えば明石君の楽才は彼女と源氏が結ばれる契機となり、やがて二人の間には娘明石の姫君が誕生することとなる。この姫君腹の皇子は立太子し、皇統に一族の血を再生させるという明石入道の悲願は果たされるのである。この明石一族の《物語》は史実をとりこみ皇統への回帰を「音楽奇瑞譚の型を借りながら主題化して」きたのであった。<sup>①</sup>だが明石一族が皇統への回帰を果たした以後の物語である宇治十帖においては、彼らの音楽が特に何らかの主題をもつて描かれているようかがわれない。宇治十帖において明石一族の音楽は何のために描かれているのであろうか。

宇治十帖における明石一族の音楽といえは、宿木巻の匂宮の琵琶演奏場面と蜻蛉巻の女一宮と箏の琴の琴の関わりがみられる場面があげられる。私見ではこの両場面において匂宮と女一宮の音楽は、宇治

十帖の人間関係のありようを象徴的に描き出すための仕掛けとして機能しているようにとらえられる。また、匂宮と女一宮の音楽はその背後にある《物語》の存在感ゆえに、血の問題を抱える薫のありかたを照らし出しているようにもうかがえる。本稿では匂宮と女一宮の音楽が描かれる場面を具体的に読み解き、彼らの音楽が物語の展開にどのように関わっているのかを検討したい。

本文の引用は「新潮日本古典集成」により、末尾の括弧内に巻数〔シツク〕と頁数を付記し、注記・符号・傍線等を私に付した。

## 一 《匂宮の琵琶》と中の君の箏の琴

①《匂宮△》なつかしきほどの御衣どもに、直衣ばかり着たまひて、琵琶を弾きあたまへり。黄鐘調の掻き合はせを、いとあはれに弾きなしたまへば、女君も心に入りたまへることにて、もの怨じもし果てたまはず、小さき御几帳のつまより、脇息に寄りかかりて、ほのかにさし出でたまへる、いと見まほしくらうたげなり。…《中略》…《菊ノ》いと見所ありてうつろひたるを、取り分きて折らせたまひて、<sup>②</sup>「花のなかにひとへに」と誦じたまひて、<sup>③</sup>「なにがしの皇子の、この花めでたる夕ぞかし、いにしへ天人の翔りて、琵琶の手教へけるは。何ごとも浅くなりにたる世はもの憂しや」とて御琴さし置きたまふを、くちをしとおぼして、<sup>④</sup>「心こそ浅くもあらめ、昔を伝へたらむことさへは、なぞてかさしも」とて、おぼつかなき手などをゆか

しげにおぼしたれば、<sup>①</sup>「さらば、ひとりことはさうさうしきに、さしいらへしたまへかし」とて、人召して箏の御琴とリ寄せさせて、弾かされたまつりたまへど、<sup>②</sup>「昔こそまねぶ人もものしたまひしか、はかばかしく弾きもとめずなりにしものを」と、つつましげにて手も触れたまはねば、…《中略》…まめやかに怨みられてぞ、うち嘆きてすこし調べたまふ。

（宿木 七・三三六〜八）

国宝源氏物語絵巻にも描かれた、匂宮の琵琶と中の君の箏の琴による合奏の場面である。匂宮が薫との仲を疑うのが怨めしくすねた素振りを見せていた中の君であったが、琵琶の音に惹かれて態度を軟化させる。「女君も心に入りたまへることにて」とあるように、中の君自身も琵琶を嗜むからこそ匂宮の琵琶が気になつてしまつたのであつた。中の君と琵琶。八宮は幼い頃より「姫君（中大君）」には琵琶、若君（中中の君）には箏の琴（橋姫 六・二六一）を教へていたが、橋姫巻の薫の垣間見場面では大君が箏の琴、中の君は琵琶と普段とは逆の楽器を弾いていた。<sup>①</sup>中の君と琵琶の関わりを想起させつつ、匂宮の琵琶と中の君の箏の琴の合奏へと移つていく<sup>②</sup>は、橋姫巻における薫の垣間見と併せて読まなければなるまい。この橋姫巻の薫の垣間見と<sup>③</sup>①の関わりについては特に中川照将氏が詳細に論じている。まずは先行論に従つて<sup>④</sup>①の場面を読み解いておく。

ある夜薫は姫君達の合奏を聞く機会を得るが、その時琵琶は「も

めいたる「音は「たえたえ」にしか聞こえてこなかつたとある（二七三）。後日薫は琵琶で八宮の琴の琴と合奏した時、姫君の琵琶を所望するが、八宮は「箏の琴の音こそ、心得たるにや」（二九三）と薫に娘の箏の琴との合奏を勧め、娘にも箏の琴を弾くよう勧める。先に八宮が大君に琵琶、中の君に箏の琴を授けていたとあつたのを考え併せれば、この時八宮に箏の琴を弾くよう指示された娘とは中の君であつた可能性が高い。そして八宮が薫に「箏の琴の音こそ」と言つたのは、西耕生氏が指摘したように「薫に対して中の君を引立てようとする」意図があつたからだとみられる。中川氏はさらにふみこんで、八宮には薫と中の君を結婚させようという目論見があつたとし、琵琶と箏の琴による合奏が大きな意味をもつと説く。中川氏の論によると、八宮は普段娘達にさせている琵琶×箏の琴という合奏のかたちをそのまま薫と中の君にスライドさせ、「薫にあえて中君とのパートナー意識を芽生えさせようとしている」のであり、そもそも薫に大君の楽器である琵琶を勧めたこと自体、八宮は大君を薫に縁づけようとする考えを全く抱いていなかつた証拠とみられるのだという。<sup>⑤</sup>ところが薫は先の垣間見で、

②内なる人一人、柱に少し隠れて、琵琶を前に置いて、撥を手

まさぐりにしつづけたるに、…《中略》…さしのぞきたる顔、

いみじくうたげにほひやかなるべし。添ひ臥したる人は、

琴の上に傾きかかりて：…《中略》…うち笑ひたるけはひ、今少し重りかによしづきたり。

（二七五〜六）

と琵琶の前に中の君、箏の琴には大君がいるのを見ていた。中川氏は②で薫が琵琶の奏者Ⅱ中の君、箏の琴の奏者Ⅱ大君だと認識したことで、薫は八宮から大君のことを依頼されたと思誤解したことになる、そして八宮亡き後の薫と大君の恋のありかたもこの齟齬によって左右されていたとみられると論じている。<sup>7)</sup>

以上より①に戻ると、琵琶×箏の琴という合奏のかたちはそのままで、琵琶を演奏する男君が薫ではなく匂宮になっている。箏の琴を奏するのは同じ中の君でありながら、琵琶の奏者だけが異なるのである。この差異によって薫の琵琶と中の君の箏の琴による合奏こそが実は「宇治十帖における薫のあるべき恋愛を象徴するもの」であったこと・薫が思い違いをしていたことが物語の表面に押し出されてこよう。八宮から大君を依頼されたと思違いをした薫は、本来は自身の相手であるはずの中の君を匂宮に勧め、その結果「八宮によつて箏の琴の奏者(中君)との合奏・結婚相手として設定された琵琶の奏者が、薫から匂宮に変化することになった」<sup>8)</sup>のである。この①の合奏に至るまで、匂宮の相手である宇治の姫君——都の人間にはそれが姉妹のどちらなのかは不明である——の箏の琴の腕前が都の人々の評判になつてゐる様や(総角 七・七九)、匂宮が箏の琴を「掻き鳴らす場面(早蕨 七・二一九)がある。先行論をふまえれば、これにより誰と誰の琵琶×箏の琴の合奏が成立し得るのかどうかか曖昧になり、薫と中の君の合奏成立の可能性が残されているのだとみることできよう。

『源氏物語』において男女の合奏とは二人の情の通い合いを保証するものとされ、①の匂宮と中の君の合奏も「夫匂宮のリードによつて中の君が合奏する、平凡ながらもほほましい夫婦交歓の場」と位置づけられる。<sup>1)</sup>相性が良くないと合奏は染しめない。合奏成立という事実そのものが中の君に対する匂宮の愛情の保証になるからこそ、「匂宮と六の君の結婚は仕方がないのだし、宇治にいた頃に比べて今は幸せなのだから良いではないか」(二三九)という老女房達の中の君批判を導き出すのである。

このように中の君が匂宮と合奏を楽しむことができる女君だと確認されるかたちで中の君の物語に幕が降ろされると、今度は誰とも合奏できない女君浮舟の物語が始まる。音楽の視点から見ると、父八宮から授けられた箏の琴によつて「幸人」(二三九)と評されるまでのぼりつめた中の君の物語の反転として浮舟の物語がある。さらにいえば①は、父八宮の采才を継承できず、音楽によつて他者と繋がることのできない浮舟の悲劇性を高めるための布石として位置づけることもできよう。<sup>1)</sup>

## 二 〈匂宮の琵琶〉と宮の御方の琵琶

匂宮の琵琶演奏が描かれる宿木巻に、もう一人の琵琶の女君——宮の御方の存在が突如呼び起こされているのには注意される。

③あだなる御心なれば、かの按察使の大納言の、紅梅の御方をもなほおぼし絶えず、花紅葉につけてものたまひわたりつつ、

(六ノ君・宮ノ御方ノ)いづれをもゆかしくはおぼしけり。

(宿木 七・一五九)

紅梅巻の紅梅大納言の発言によると、

④「……時々うけたまはる御琵琶の音なむ、昔おぼえはべる。故六条の院の御伝へにて、右の大臣なむ、このころ世に残りたまへる。源中納言、兵部卿の宮、何ごとにも、昔の人に劣るまじう、いと契りことにものしたまふ人々にて、遊びのかたは、取り分きて心とどめたまへるを、手づかひすこしなよびたる撥音などなむ、大臣には及びたまはずと思つたまふるを、この御琴の音こそ、いとよくおぼえたまへれ」  
(紅梅 六・一八七)

と宮の御方の琵琶は夕霧の手に通うという。夕霧は源氏から琵琶を伝授されたところから、宮の御方の琵琶は叔父源氏の筋を伝えていくということになる。誰もが源氏の時代を称え追慕してやまない続篇世界において「六条の院の御伝へ」に通うというのはただことではない。宮の御方の琵琶の格は高いものとなろう。だが源氏が琵琶を嗜むと述べられた箇所はあつても演奏する姿は一度も描かれていないし、ましてや夕霧への伝授はここが初出である。源氏の楽器といえは琴の琴であつて源氏と琵琶の結びつきは弱いのに、ここで紅梅大納言から源氏→夕霧の琵琶伝授が語られるのは唐突にすぎる。多少の無理を犯しつつも宮の御方の琵琶は夕霧の手に通うと設定されているのである。

紅梅巻において、勾宮の宮の御方思慕に琵琶が影響を及ぼした跡

は認められない。そもそも宮の御方が琵琶の名手であると勾宮が知っていたのか否かもよくわからない。紅梅巻で宮の御方を源氏の筋を伝える琵琶の名手と設定する必然性は必ずしも明らかではなく、特にあげるならば「唐めいた印象の強い、幽玄で神秘的」、一般の姫君には弾くのが難しいといった琵琶の属性が、宮の御方のイメージにふさわしかったことがあるうか。

では宿木巻に紅梅巻が持ち込まれ、発展しない勾宮の宮の御方思慕が示されればどうなるだろうか。紅梅巻で「昔」を思い起させる琵琶の奏者としてその特殊性を強調されていた宮の御方。勾宮は紅梅大納言が勧める中の君には見向きもせず、継子であり「古めかしき御筋」(一九一)の宮の御方こそ御ふさひのかた(一九五)だと信じ込み文を送っていたが、宮の御方の方は誰とも結婚する気はなかった。琵琶を奏で男君を拒む皇統の女君——宮の御方と大君の造型はよく似ている。さらに前節に関連していえば、父親が勧める女君ではなく結婚を拒む女君の方を男君が思慕するという構図(紅梅大納言—中の君—宮の御方—勾宮／八宮—中の君—大君—薫)も酷似している。では④で勾宮の宮の御方思慕が述べられれば、成就しなかつた薫と大君の恋が再浮上させられることになるう。宿木巻の勾宮の宮の御方思慕の記述は、相似する薫と大君の恋を呼びさまし、琵琶の奏者同士の恋が成立不可能であることを示すための指標だととらえられる。

勾宮は宮の御方とは結ばれず合奏は成立しないが、中の君とは結

ばれて合奏も成立した。六の君との結婚という危機的な状況においても匂宮は中の君と愛情を確認しあえたのである。一方薫も女二宮降嫁により類をみない榮誉をその身にうけながらも、故大君への未練と中の君への執着が絡み合い苦悶し続けている。①では中の君と合奏ができる匂宮と孤独な薫との差異が露呈しているとみることができよう。

### 三 〈匂宮の琵琶〉と〈薫の笛〉

ところで①の匂宮の発言に出てくる、天人が「なにがしの皇子」に琵琶を伝授したという伝承については『源氏釈』・『河海抄』等の注釈が言及しており、類話が『江談抄』『古今著聞集』『十訓抄』等に見える。森野正弘氏によれば「なにがしの皇子」に想定されるのは延喜帝の皇子——源高明・村上天皇・嵯峨隠君子（兼明親王か）——であるという<sup>1)</sup>。かつて明石入道は源氏に、

⑤ 「なにがし、延喜の御手より弾き伝へたること、三代になむなりはべりぬるを、かうつたなき身にて、この世のことは捨て忘れはべりぬるを、もの切にいぶせきをりをりは、かき鳴らしはべりしを、あやしうまねぶものはべるこそ、自然にかの先大王の御手に通ひてはべれ」  
(明石 二・二七六〜七)

と自分は延喜帝から奏法を伝えて三代目で、娘明石君は「先大王」の手に通う名手だと語っていた。一族の音楽の祖に延喜帝を求めている点で、明石入道の話と①で匂宮の語った伝承はほぼ連繫をなす。

（匂宮の琵琶）の背後には前代より脈々と続く明石一族の（物語）が存在するのだ。それにしてもなぜ①でわざわざ明石一族の音楽の由緒が確認されなければならないのだろうか。

①以外で匂宮が琵琶を奏する姿は同じく宿木巻、女二宮降嫁前夜に催された藤花の宴にのみみられない。

⑥故六条の院の御手づから書きたまひて、入道の宮にたてまつらせたまひし琴の譜二巻、五葉の枝に付けたるを、大臣取りたまひて奏したまふ。次々に、箏の御琴、琵琶、和琴など、朱雀院のものどもなりけり。笛は、かの夢に伝へしにしへの形見のを、またなきものの音なり、とめでさせたまひければ、このをりのきよらより、またはいつかははええしきついでであらむとおぼして、取う出たまへるなめり。大臣和琴、三の宮琵琶など、とりどりに賜ふ。大将の御笛は、今日ぞ世になき音の限りは吹き立てたまひける。  
(宿木 七・二五一〜二)

夕霧へ和琴、匂宮には琵琶と楽器が各々に振り分けられる。薫は柏木が伝えた笛をもち出し「音の限り」に「吹き立て」た。だがこれは危険な行為であった。なぜならかつて八宮は薫の笛の音を聞いて、

⑦ 「笛をいとをかしうも吹きとほしたなるかな。誰ならむ。昔の六条の院の御笛の音聞きしは、いとをかしげに愛敬づきたる音にこそ吹きたまひしか。これは澄みのほりて、ことごとしき氣の添ひたるは、致仕の大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ」

(権本 六・三〇七)

と見抜いたように、〈薫の笛〉は薫の致仕大臣一族の血統を証明するからである。浅尾広良氏の論によれば藤花の宴において笛を「音の限り」に「吹き立て」た薫は「故式部卿宮」に想定される史実上の人物「絲竹の長者式部卿貞保親王の継承者」として定位されており、前代の音の恢復という柏木の遺志が達成されたとみなせるという。

〈薫の笛〉の音が響けば響くほど、薫を皇女へとむかわせる致仕大臣一族の血統——藤氏の血——は証しだてられていくのである。

さらに危険だったのは〈薫の笛〉の存在そのものである。藤花の宴に出された他の楽器は朱雀院から女三宮へ譲渡されたものなのに対し、薫の笛は「陽成院」→「故式部卿宮」→「柏木」→「落葉宮」→「夕霧」→「源氏と複雑な経路を辿ったものであった。楽器・源氏直筆の琴の琴の譜といった由緒正しい品々の中で、唯一薫の笛だけはその素姓と薫の手に渡った経由ははっきりと公にできない事情がある。薫が吹くのは誰から伝えられた笛なのか。藤花の宴は〈薫の笛〉の素姓が問われて然るべき場であった。

このように藤花の宴で〈薫の笛〉によつて薫の血統が確認されることと、①で句宮が琵琶を弾きながら一族の音楽の伝承を口にする<sup>こと</sup>は無関係ではあるまい。〈句宮の琵琶〉と〈薫の笛〉は対になっているとみるべきであろう。句宮が一族の音楽の相承における自らの位置をとらえ直すならば、では薫の方はどうなのか。一族の音楽の由緒を改めて確認し継承の行方に思いを馳せる句宮の姿は、同時に薫の音楽継承のありかたを照らし出す。句宮の琵琶は中の君と

の間の子によつて伝えられていくであろう。だが源氏の子として女二宮を戴いた薫の笛は、誰にどのように伝えられていくのであろうか。もし薫の子が誕生し笛が伝えられたとしても、それまでにたどった過程は決して明らかにはできない。〈句宮の琵琶〉は〈薫の笛〉と響き合い、薫の出生の問題を鮮やかにかたどるのである。

#### 四 〈女一宮の箏の琴〉

次にあげるのは蜻蛉巻、明石中宮の六条院滞在の様子が描かれた箇所である。

⑧「秋の盛り、紅葉のころなどを見さらむこそ」など、若き人々ばかりをしがりて、皆参りつどひたるころなり。水に馴れ月をめでて、御遊び絶えず、常よりも今めかしければ、この宮（＝句宮）ぞ、かかる筋はいとこよなくもてはやしたまふ。朝夕に目馴れても、なほ今見む初花のさましたまへるに、大将の君は、いとさしも入り立ちなどしたまはぬほどにて、はづかしう心ゆるびなきものに、皆思ひたり。

（蜻蛉 八・一六〇）

夕霧によつて再興された六条院には明石中宮の女房達が<sup>大勢集い</sup>、日々明石一族の栄華を讃えるかのように音楽が奏でられる。句宮も演奏に参加し座をひききたて「朝夕に目馴れても、なほ今見む初花」のような清新さで薫を圧倒する。女房達は皆薫に距離を感じ、薫も居心地が悪い。寝殿東面には明石中宮、西面には女一宮が、「はるばると多かる対ども、廊、渡殿」（一六〇）には女房達が溢れかえり、

以前薫が母女三宮とともに暮らした頃の名残りはどこにもみられない。かつて春の御殿(匂兵部卿 六・一六四)と呼ばれた東南の町であったが、その西側の庭は尼になった女三宮のために「秋ころ、西の渡殿の前、中の塀の東の際を、おしなべて野に作らせたまへり」(鈴虫 五・三五二)と、源氏によって秋の風情に似つかわしいよう造作させられていた。女三宮のためにしつらえられた東南の町の秋の庭を、今は明石一族が享受する。

様変わりした東南の町のどこにも落ちつけず、うろつくしかない状況の中で、薫が度々訪れていたのが西の渡殿である。西の渡殿は夏の法華八講の折、偶然憧れの女一宮を垣間見した場所であった。

ある時いつものように女一宮の面影を求めて薫が西の渡殿を訪れると、そこでは女一宮の女房達が月を愛でながら箏の琴を弾くなどして秋の夜を楽しんでいた。

⑨箏の琴いとなつかしう弾きすさぶ爪音、をかしく聞こゆ。思ひかけぬに寄りおはして、「など、かくねたまし顔にかき鳴らしたまふ」とのたまふに、皆おどろかるべかめれど、すこしあげたる簾うちおろしなどもせず、起きあがりて、「似るべき兄やははべるべき」といらふる声、中將のおもととか言ひつるなりけり。「まろこそ御母方の叔父なれ」と、はかなきことをのたまひて、「例の、あなたにおはしますべかめりな。何わざをか、この御里住みのほどにせさせたまふ」など、あぢきなく問ひたまふ。「ごうくにても、何」とをかは。ただ

かやうにてこそは過ぐさせたまふめれ」と言ふに、をかしの御身のほどや、と思ふに、すすろなる嘆きの、うち忘れてしつるも、あやしと思ひ寄る人もこそ、とまぎらはしに、さし出でたる和琴を、たださながら掻き鳴らしたまふ。律の調べは、あやしきをりにあふと聞こゆる声なれば、聞きにくくもあらねど、弾き果てたまはぬを、なかなかなりと、心入れたる人は、消えかへり思ふ。

(蜻蛉 八・一六六〜七)

薫は『遊仙窟』、美女十娘が弾く箏の琴の音を耳にした張郎が「自隠多姿則 故々將々纖手 時々弄小絃 耳聞猶氣絶 眼見若為怜」と詠じたのを踏まえ(古訓には「故々」は「ネタマシカホニシテ」とある)、女一宮の女房にa)どうしてそんなに私をじらすのか。箏の琴だけでも私は心悩まされるのに、あなたの美しいその姿を見ればますます慕わしく思うだろう」と戯れかけた。それは「自隠多姿則 欺他獨自眠」——自分の前に姿を見せることなく「あなた」||明石中宮の許で眠る女一宮の事を少しでも知りたいがためであった。⑩で実際に箏の琴を弾くのは中將のおもとであり、薫から十娘に諭えられているのも表面上は彼女なのだが、真に十娘に重ねられているのももちろん女一宮である。女一宮は美しく、比類なき美女十娘に諭えられても不足はない。それに女一宮も十娘と同じく、箏の琴の才能に恵まれているはずである。

女一宮の曾祖父明石入道の箏の琴は「今の世に聞こえぬ筋」であったし、明石君の箏の琴は源氏から「あはれになつかしう」と評され、

「今めかしう、あなめでた」と形容される藤壺宮の手と対比されてい  
た(明石 二・二九九)。明石中宮の箏の琴も六条院の女樂において  
「いとらうたげになつかしく、母君の御けはひ加わりて、ゆの音深  
く、いみじく澄みて聞こえつるを……」(若菜下 五・一八四)と、  
やはり「なつかし」と評されている。<sup>22</sup>⑨の箏の琴の調べも「いととなつ  
かしう」と形容されているし、薫の問いdに対して中將のおもとは  
e女一宮は音楽に親しんで日々を過ごしていると答えている。なら  
ば⑨の中將のおもとから、箏の琴を弾く女一宮の姿が透視されてこ  
よう。<sup>23</sup>

否、⑨では女一宮だけではなく匂宮も召喚されており、それはや  
はり『遊仙窟』を引いたb c、侍女が張郎に十娘を紹介した一節を  
踏まえた薫と中將のおもとのやりとりからうかがえる。中將のおも  
とは「氣調如兄 崔季珪之小妹」からb「いいえ、私には十娘のよう  
に「氣調」の似る兄などおりません。だから私は十娘ではございませ  
ん」と薫に応じた。すると薫は「容貌似舅 潘安仁之外甥」を引いて  
c「いや、私は女一宮の母方の叔父だ」と返してd女一宮の話題へと  
もつていく。中將のおもとはb十娘に崔季珪がいるのとは違つて私  
には「氣調」の似る兄はいないと答えたが、女一宮には「容貌」の似る  
匂宮がいる。<sup>24</sup>

夏、西の渡殿で女一宮を垣間見した薫は妻女二宮に女一宮と同じ  
薄物の衣を着せて心を慰めようとしたが、むしろ「なほさまざまな  
るにや」(二四九)と二人の皇女の差異が明確になるばかりであった。

その翌朝、薫は薄物の衣を纏つた匂宮に女一宮の面影を見て胸を騒  
がしている。

⑩(匂宮ガ)丁子に深く染めたる薄物の單を、こまやかなる直衣に  
着たまへる、いとこのましげなり。女(女一宮)の御みなりの  
めでたかりしにも劣らず、白くきよらにて、なほありしよりは  
面瘦せたまへる、いと見るかひあり。おぼえたまへりと見るに  
も、まづ恋しきを、いとあるまじきこと、としづむるぞ、ただ  
なりしよりは苦しき。  
(蜻蛉 八・一五〇)

女一宮と似るのは異母妹女二宮ではなく同腹の匂宮なのだと思  
い知らされる。⑩のbを注して『細流抄』は「匂宮は女一宮の兄に  
てましますは、女一宮を見たてまつらんと思ひ給はば、匂宮を見給  
へかした也」と、⑩と関連づけて中將のおもとは「女一宮様の御姿を  
拝したいならば兄上の匂宮様を御覧なさいませ」と薫に切り返した  
と解釈しており、『弄花抄』も「心は匂宮の事を思へり。女一宮に  
似給へる匂宮の、兄にていらせ給へるを見給へかしなといふ心也」  
とする。玉上琢彌氏の『源氏物語評釈』が指摘するように⑩のbに  
は「はべるべき」と敬語を用いていないのだから、中將のおもとは女  
一宮ではなく自分自身の事を述べたとするのが適当だろう。しかし  
『細流抄』・『弄花抄』が匂宮を透視したこと自体は誤りではない。  
薫が『和漢朗詠集』にもとられたこの有名な一節を引いて女一宮の  
叔父を名乗れば、対偶的に「匂宮」の存在が浮上するのは必定なの  
である。



⑨に匂宮を呼び込む力は、箏の琴を強く女房が中将のおもとであることによつてさらに強められている。⑩で西の渡殿を訪れる前、薫は中将のおもとの名を匂宮に教えた女房のその心無さと、自分よりも匂宮の方に親しむ女房達の態度に憤慨し、さらに「わがさもくちをしよう、御ゆかりには、ねたく心憂くのみあるかな」（二六五）と匂宮だけでなく女一宮をも引つ張り出して鬱々としていた。中将のおもとが⑨以前に登場したのはこの一度だけなのだから、⑨に「中将のおもととか……」とあれば薫の中でこの出来事の記憶がたぐり寄せられたことを示していよう。

薫が『遊仙窟』を持ち出して女一宮の叔父を詐称し血の繋がりを主張しても虚しい。薫の自負は女一宮と真実血が繋がる匂宮の前には説得力を持たず崩れていく。薫は自ら『遊仙窟』を引いて女一宮への接近をはかつたのに、逆にその『遊仙窟』によつて明石一族に対する疎外感を増幅させてしまった。表向きの父源氏の血筋を証明し得るべくもなく追い詰められた薫は、今度は母女三宮をもちだして自尊心の回復を試みようとする。

⑪わが母宮も劣りたまふべき人かは、后腹と聞こゆばかりの隔てこそあれ、帝々のおぼしかしづきたるさま、異事ならざりけるを、なほこの御あたりは、いとことなりけるこそあやしけれ、明石の浦は心にくかりける所かな、など思ひ続くことどもにわが宿世は、いとやむごとなしかし、まして、並べて持ちたてまつらば、と思ふぞいと難きや。

（蜻蛉 八・二六七）

薫は女一宮の高貴さが女三宮を上まわることを認め、続いて女一宮その人だけではなく「明石の浦」に明石一族がもつ気高い雰囲気まで思いをめぐらす。かつて明石君が源氏と結ばれた当初、「明石」とは鄙という侮蔑のニュアンスをもつたことばであつたはずだ。だが明石女御が入内し、やがて明石君自身も春宮の外祖母としてある程度地位が向上するに伴い、「明石」とは苦難を乗り越え幸いを得た明石一族の〈物語〉を想起させ、部外者から羨望の思いをもつて発せられることばに転じていく。近江君が双六に勝つために「明石の尼君、明石の尼君」（若菜下 五・一六）と唱えたのもそれに類する一つの例であろう。統篇において⑪以外で「明石」ということばがみえるのは匂兵部卿巻に一例のみ、「二条の院とて造り磨き、六条の院の春の御殿とて、世にののしりし玉の台も、ただ一人の末のためなりけり、と見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひきこえたまへり」（六・一六四）と、やはり彼ら一族の類い稀なる幸運と栄華の〈物語〉を改めて振り返る文脈の中で「明石」ということばが現れている。

父の問題によつて劣等感に苛まれる窮状の中で「明石の浦」ということばが現れたのは、薫が単に自分対匂宮・女一宮兄妹というレベルではなく、「ゆかり」をもたず誰とも連帯感をもてない自分と〈物語〉を背後にもつ明石一族の匂宮・女一宮兄妹という対比によつて、都における自己の位置を再確認する必要性に迫られたことを示している。明石一族の〈物語〉を象徴する（女一宮の箏の琴）は匂

宮と共に、薫の血の問題の重みを再確認させるのである。このように薫は女一宮と匂宮の絆の深さと明石一族の〈物語〉の重厚さに圧倒されたはずなのに、それでも強引に自己肯定をし、その上女二宮を得てもなお女一宮という至高の皇女を求めてやまない。薫はその心を慰めるべく対の君に接近するが、彼女は薫の理想的な相手ではなかった。うちひしがれた薫は再び浮舟を求めることになる。

## 結

〈匂宮の琵琶〉と〈女一宮の箏の琴〉は明石一族の〈物語〉を喚起し匂宮・女一宮と一族の繋がりや強さを再確認させ、それと同時に薫のありかたを露呈するよう機能している。血統の証明としての楽才の継承は匂宮と女一宮にはプラスに、逆に薫にはマイナスに働きかけ、匂宮・女一宮と薫の差異を浮き彫りにさせているのである。いずれにせよ匂宮・女一宮と薫の音楽は正篇で構築された「音楽と血脈の論理」を承けているのだが、八宮から楽才を継承し得なかった浮舟は「音楽と血脈の論理」を解体してしまう。

蜻蛉巻後半、血の問題を再確認させられた薫が、明石一族の秋に興を添えるかのように和琴を奏でていたのとはほぼ同じ頃——月の美しい「八月十余日のほど」(手習 八・二〇五)、小野にいる浮舟も和琴「あづま琴」によって血の問題を改めて確認させられている。この時期的な一致は偶然であろうか。〈匂宮の琵琶〉と〈女一宮の箏の琴〉によって繰り返し出生の問題を浮上させられるという描き方

をされる薫と、「あづま琴」によって薫から父八宮との隔絶を自覚させられた過去(東屋 七・三四四〜五)を反芻させられる浮舟。「出生」という最も基本的な所で自己同一性を欠いている「点で鏡像的な関係」にあるといわれる薫と浮舟のありかたは、〈物語〉を背後にもつ匂宮・女一宮とのありかたと対照的である。

〈匂宮の琵琶〉は確かに中の君の箏の琴と響き合い、両者の愛情の通い合いを確認・強調させるけれども、同時に匂宮と薫の差異を浮き彫りにするよう機能している。この〈匂宮の琵琶〉によって薫が藤氏の血統にあることがより鮮明にかたどられたことと、その後の東屋巻、浮舟が音楽によって八宮の血筋を証明できなかったことは線条的にとらえることができるのではないだろうか。それは〈女一宮の箏の琴〉によって薫の血の問題が浮上させられることと、手習巻、再び「あづま琴」によって浮舟の血の問題が押し出されていることも然りである。〈匂宮の琵琶〉と〈女一宮の箏の琴〉にはただ単に薫の血の問題を対偶的に照らしだすのではなく、薫からさらに浮舟の問題までもを連鎖的に引き出す触媒のような役割があると考えられる。〈物語〉によって一族としてのアイデンティティを堅く保証されている匂宮と女一宮の音楽だからこそ「音楽と血脈の論理」を示すことが可能となり、逆に「音楽と血脈の論理」がネガティブに働きかける薫とその論理自体を解体してしまう浮舟のありかたを導き出せたといえよう。宇治十帖の音楽は連繋し共鳴しあい、それぞれのありかたを相対化しているのである。

〔注〕

(1) 浅尾広良「中務宮と明石物語」——「松風」巻の表現構造——

(『中古文学』第38号 昭61・11)。

(2) どちらが大君・中の君なのか古注釈以来見解が分れていたが、現在では筆の琴の方が大君・琵琶が中の君だという解釈で動かない。この問題については森野正弘「宇治姉妹と筆の琴——物語言語としての「御」の明滅攷——」(『王朝文学史稿』第19号

王朝文学史研究会 平6・2)が詳しく検討している。

(3) 中川照将(イ)「八宮の「本心」と薫の「誤解」——薫に見る「昔物語」からの逸脱・序章——」(『詞林』第22号 大阪大学古代

中世文学研究会 平9・10)。(ロ)「薫の恋愛と筆の琴」——宇治十帖における「合奏」の意味——(『語文』 大阪大学国語国文学会 第73輯 平11・10)。(ハ)「薫の「誤解」と大君の結婚拒否」(『古代中世文学論考』第三集 新典社 平11)。

(4) 西耕生「ものの音めづる「心」——大君をとりまく人びと——」(『中古文学』第47号 平3・5)。

(5) 前掲注(3)の(イ)論文。

(6) 同(ロ)論文。

(7) 同。

(8) 同。

(9) 同(ハ)論文。

(10) 小林美和子「琵琶行」と琵琶演奏——源氏物語の世界——(『王

朝の表現と文化——源氏物語・枕草子を軸として』笠間書院 平11)。

(11) 浮舟の音楽と血の問題を論じたものには、吉井美弥子「浮舟と父八の宮」(『王朝文学 資料と論考』笠間書院 平4)がある。

(12) 源氏と琵琶の関係を論じたものには、植木典子「光源氏と琵琶」(『解釈』32—12 昭61・12)がある。

(13) 岩佐美代子「宇治の中君」(古典講演シリーズ5 『伊勢と源氏——物語本文の受容——』国文学研究資料館編 臨川書店 平12)。

(14) 宮の御方と宇治の大君の造型の類似については、三田村雅子「源氏物語第三部発端の構造」(『日本文学』昭50・11)等に指摘がある。

(15) 紅梅巻を取り込み、匂宮の宮の御方思慕が薫の恋のありかたを浮き彫りにする宿木巻の方法については、原陽子「紅梅巻と宇治十帖」(『中古文学』第48号 平3・11)が論じている。

(16) 森野正弘「明石入道と琵琶法師」(『中古文学』第62号 平10・11)。

(17) 薫の笛については、小嶋菜温子「柏木の笛——光源氏主題の継承をめくって——」(『むらさき』第23輯 昭61・7)、浅尾広良「柏木遺愛の笛とその相承」(『むらさき』第25輯 昭63・7)等がある。

(18) 前掲注(17)論文。

(19) 薫の皇女志向と笛の関わりについては、前掲注(17)小嶋論文、上原作和「(琴)のゆくへ(3)——楽継承譚の方法あるいは宇治十帖の精神的基層——」(『光源氏物語の思想史の変貌——(琴)のゆくへ』有精堂 平6)等がある。

(20) 明石一族と秋の結びつきに注目したものに、加藤昌嘉「源氏物語蜻蛉巻の機構——六条院と明石一族——」(『中古文学』第62号 平10・11)がある。

(21) 『遊仙窟』本文の引用及び訓読は『醍醐寺蔵本 遊仙窟総索引』(典籍索引叢書第十三巻 築島裕 汲古書院)による。ただし表記は私に改めた。

(22) 前掲注(1)論文。

(23) 同。浅尾論文では女一宮が明石一族の箏の系譜に連なることみなしている。

(24) 正篇では女一宮の方が匂宮よりも年長として設定されていたが、続篇においては女一宮は匂宮の妹であるかのように描かれているように読める。例えば総角巻、匂宮が女一宮に戯れかけた場面(七・八六く八)において引用されているのは『伊勢物語』第四十九段、兄が妹を思慕する話である。また年立でみれば蜻蛉巻において女一宮は三十才前後であるはずだが、依然として「姫宮」という呼称が用いられているのも女一宮が年若いように読めてしまう要因である。

(25) 引用は伊井春樹編「源氏物語古注集成」七『内閣文庫本細流

抄』(桜楓社 昭55)、同八「弄花抄』(同 昭58)による。ただし表記は私に改めた。

(26) 第十二巻、三二七頁。

(27) ⑨の『遊仙窟』引用について論じたものには、中西進「『源氏物語』と『遊仙窟』」(鈴木日出男編『国文学解釈と鑑賞』別冊『文学史上の『源氏物語』』平10・6)がある。

(28) 「明石」ということばについて論じたものに、東原伸明「源氏物語と(明石の力)」(『物語文学史の論理——語り・言説・引用——』新典社 平12)、前掲注(20)加藤論文がある。

(29) 明石一族への疎外感にとらわれた薫に対し、女一宮の女房方から和琴が差し出されるというのは、何とも皮肉めいたものが感じられる。なぜならば薫の和琴演奏といえは竹河巻、玉鬘が薫の和琴の音を聞いて亡き父致仕大臣や柏木を偲び、涙していたこと(六・二一〇く一)が想起させられるからである。だが蜻蛉巻と成立に関して問題がある竹河巻とを安易に読みあわせるのは避けるべきであろう。

(30) 前掲注(1)吉井論文。

(31) 三田村雅子「(音)を聞く人々——宇治十帖の方法——」(『物語研究』新時代社 昭62)。

——あかさこ・しょうこ、広島大学大学院博士過程後期在学——